

提唱

四弘誓願とその展開

稲瀬 光常

しく(しく)
四弘誓願文

衆生無辺誓願度
煩惱無尽誓願断
法門無量誓願学
仏道無上誓願成

衆生は無辺なり 誓って度せんことを願う
煩惱は無尽なり 誓って断ぜんことを願う
法門は無量なり 誓って学せんことを願う
仏道は無上なり 誓って成じょうぜんことを願う

本席は総裁の命によりまして講座を勤めさせていただきます。それも従来からの提唱録によらないで、新作でやるようにとの御指示でありまして、一昨晩は洪涛庵老師がおやりになったと思いますが、本日は私がそのような趣旨でやらさせていただきます。

新作と申しましても全くの新作という訳には参りませんので、今日は「四弘誓願とその展開」と銘打って、考えるところを申し述べてみたいと思います。まず四弘誓願について一通りみてみたいと思います。

1 正しい志願について

「四弘誓願」というのは仏の誓願であると言われ、私たち修行者はこの仏の誓願を己が誓願として、仏道の修行に取り組むことが求められます。

孔子も論語為政編の中で「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従って矩を超えず」といっていますが、私たちの人生、どのような道を歩むにしても、一番最初に根本に於て出発の当初確立しておかなければならないことは、「志す」ということであります。学に志す、道に志すという「ころざす」ということがなければなりません。

これが「正しい」ことの根本で、例の十牛図でいうならば、牛を求めたずねるところの「人」のことであります。

この「正しい志」というものが確立していないと途中で挫折しやすい、「源正しからざれば、流れ長からず」という訳です。

その「正しい志」「正しい志願」こそ、この四弘誓願であります。

2 衆生無辺誓願度について

四弘の誓願の第一は、言うまでもなく衆生無辺誓願度」であります。「衆生は無辺なり、誓って度せんことを願う」という訳ですが、一般的な話しは割愛して、ここにいう「度」というのは一体何か？

何をすることを「度」というのであるかに着目してみたいと思いません。

「度」とはわたるといこと、こちらの岸から向こうの岸に即ち彼岸に渡っていくという意味であります。こちらの岸から彼岸に渡るためには、まずこちらの岸の有様をよくよく見定めてかからなければなりません。

静かに胸に手をあてて、私たちの人生の根本の営みとは一体何物であるかということ問いかける必要があります。

私たちの多くは職業をもち、家庭を営み、一定の社会的活動をして生きていますが、それらの自らの生の営みというものがどのような意味をもつものであるのかということにつきましては、日頃は目前のことに忙殺されて根本的な省察ということをなさないまま月日が経ってしまうというのがふつうの人の日常であります。そのところを立ち止まって省察するところからはじめることになります。

そして深く省察してみれば、私たちの日常というものは多くは泡のように生じては消え、消えては生じてくるものを追い求めていることに気付く訳であります。

「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり」と言いますが、この世のことは無常迅速で極端なことを言えば昨日会った人が今日はもういない。今日あった人も一ヶ月後にはこの世にはないかもしれないという有様、自分自身の生命もいつまでも無限に続くものではない、そのうち必ず死ぬ身であります。

この「いずれ必ず死ぬ身である」ということを真剣に考えてみて、そこに立って、さて自分のやってきたことを振り返ってみると皆悉く、生滅の法なることに思い至る訳であります。

人生畢竟夢なりであります。

しかし、この「無常を觀ずる」ということは、世をはかなんで消極的な循世をすることではなく、ものごとの真実の姿を看破することです。

自分のやっていることが、根本的に無常である、自分自身の生命さえ、いつ終わるか分らぬ無常なもの即ち生滅の法であるということをよく肚に入れてかからねばならないということになります。これが私たちの現実つまりはこちらの岸のあり様であります。

先程、「度」とは渡るということで、こちらの岸から向うの岸、

つまり彼岸へ渡るという意味であると申しましたが、私たちは単にこの無常な生滅の世界の中に足をおろすだけではなく、次には彼岸即ち「生滅滅しやんだ」世界というものを目指してゆくこととなります。老大師の言われるように、有限、相対的な存在である私たちは、それを深く自覚した時、同時に無限、絶対的なものを求めるものであります。

「諸行は無常なり。是れ生滅の法なり」に続いて、「生滅滅し已んで、寂滅を楽しみとなす。」とありますが、この生滅滅しやんだ世界、そこを寂滅という訳ですが、「度」するというのは、無常な生滅の世界から生滅滅しやんだ寂滅の世界即ち不生不滅の大道に到ることを言う訳です。

「色は匂へど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむ、有為の奥山今日こえて、浅き夢みし酔^{えい}もせず」という例のいろは歌はここを詠んだものであります。

四弘誓願の第一願「衆生無辺誓願度」は、無辺の衆生をして、この彼岸に渡らしめる、つまりは不生不滅の大道を悟らしめることを意味しています。私たちは、この不生不滅の大道に根本を定めることによって、各人の人生というものをホンモノにする、各人の人生を意義あらしめることができる、というのであります。

3 煩惱無尽誓願断について

では、その実践はどうしたらよいか。それを実現する為にはどうすべきかということで、次の「煩惱無尽誓願断」という第二誓願が出てくる。

ここは色々な煩惱妄想というものを、誓って断ぜんことを願うという訳ですが、これは一口で言えばその煩惱、妄想の出てくるところの私たちの「心」、その「心の源底」を極めることをいうのであります。

私たちの心、精神作用というものを、よく観察してみますと、それは「一念」というものに遡ることができます。

私たちはいろいろな世界観、人生観をもち、又名利や打算等の感情を抱きながら生を営んでおりますが、その根源をつきつめると、常にポッカポッカと泡のように生じ又消えてゆくところの念慮に支配されているのがわかります。その念慮の生じる一番はじめ、つまりは「一念」というものの正体が一体何であるかを見定めなければなりません。この一念は、結局は「私」という一念、「我」という一念から生じている。そこにすべての迷いの窠窟がある訳ですが、この「無量劫来の業識」と呼ばれる「私念」「我見」というものを断じなければならぬ訳です。

「断」といいますと、それを断ってしまう、つまりは殺し滅してしまおうと取りがちですが、それはいうなれば文理解釈であって、仏教の正しい教えとは言えません。煩惱や欲望、人情や感情は汚らしいものである、罪であるとして、それを廃してしまうことと取りがちですが、そうではありません。欲望が生じたり情感が豊かなのは私たちが生きている証拠であり、それは盛んな程、活力があって良いともいえる訳であります。しかしそれがつまらぬ念慮によって踊らされ、変な方向に向って使われてしまいますと、人間性を損うこととなりますので、孔子のいわゆる「三十にして立つ」、つまりは人としての根本を確立して貪・瞋・痴の三毒を智・仁・勇の三徳、つまりは大智慧、大慈悲、大勇猛心に転じていくことを言う訳です。

これを禅では転迷開悟といい、見性成仏という訳であります。

「見性」とは、自己の本心本性を徹見するということであり、

儒教の方でも、「その心を尽くせば性を知る」と言っていますが、要は「本来の自己」に目覚めるのであります。

言うまでもないことですが、「見性」の「性」(「しょう」、「せい」)

というのは、人々の個性とか、性質とかいう性^{せい}ではなく、人間性の性であり、それは万物が生まれながらにして有している本然の姿のことであります。

水には水の性があり、植物には植物の性があり、人には人の性がある。

「天命之を性と謂い、性に率うこれを道と謂う」であります。

それは、人間が個人的な体験によって作り上げたものではなく、自然の本然の生命^{いのち}そのものを表現したものです。「ものそのもの」であります。

心の源底を極めるとは、その本^{ほん}性^{しょう}というものに行きつくこと、その本心本性というものを如実に悟れば、「天命」というもの、絶対の生命力、大自然のいのちというものを感得することができる訳です。私たちは坐禅の修行によってその莊嚴なすがたにふれたとき、自分という小さな窠窟はミジミジと消失する、「自己」だ「我」だと護生大事にしていたものが幻影であったということが分る。ここを煩惱を断ずる、という訳であります。

4 法門無量誓願学について

しかし、そのような見性、転迷開悟のためには方法がある、それが第三の誓願「法門無量誓願学」であります。

山に登るには道しるべというものがなければ仲々登れるものではありません。それと同じように道を行ずるにも道のしおり(枝折り)道しるべが必要であります。

天命は一つであり、人間の性(本心本性)は人種や国やイデオロギーや信仰によって異なるものではありませんので、得るべきところの道は一つである訳ですが、これに登る道程はいろいろある訳であります。

阿弥陀様の道即ち念仏三昧の道もあり、法華、真言、天台等々の

仏教諸派やキリスト教、儒教等々もみなその道程を示すものであります。我々の行じている坐禅工夫、参禅弁道もその一つであります。

禅の修行が他の道程と異なるところは、「伝法」、正法を伝えるという点が大変重視され、それが長きに亘って厳しく実践されてきており、従って一の道にきちんと道案内がいて、正しい道というものが示される。まちがえばそれを正してくれるという修行のシステムが出来上がっているという点であります。

道を求める人は多い訳ですが、ともすれば変なところに腰を降して、そこをホンモノだと思い違いをして一生を終えてしまう場合もある。多くはそれを鑑別する手段がない。つまりは独りよがりになってしまいがちですが、禅の方では、“無師独悟、いやしきことネズミの如し”とあって独り免許ではダメだとされている。ここが大変有難いところで、滴々相承の慧命、生きた人から人へ教外別伝されるところの仏のいのちというものが伝えられるのであります。ここが禅の他宗に冠絶するところであります。

勿論禅は特定の教義をもたず、何かを信仰するというものではなく、完全な自力で、元来あるものを悟る（自覚する）以外に別に外からさずかるものはなにもない。正に「本来清浄にして一塵も受けず」であります。同時に「仏種草」といいまして、独りよがりでないマギレもない仏の種が伝えられる訳であります。

何故そのようなことが可能であるのか。

それは、禅門に伝わるところの法財、今日まで何百年或いは千何百年と多くの祖師方が心血を注いで磨き上げてきた法財というものがいろいろとある訳でありまして、主として公案という形をなしていますが、この法財を工夫して、そこを通って行けば、知らず知らずの間に道を登ることができる、道を自得することができるようになっている訳であります。

しかもその得法の境涯に浅深がハッキリと区別されていて、実に

親切を極めている。途中で腰を下せばダメになるが、精進努力をするならば、十人が十人皆頂上まで登り切ることができるのであります。全くあぶなげのない大法、不可思議な神秘や迷信などとは無縁な大法というものがそこに開示されてくる訳であります。

ただここで気を付けなければならないのが、「禅学をするな！」ということであります。磨訶庵老師の最後の御垂戒となった去年10月の房総撰心円了の垂示をお伝えをしておきたいと思えます。

老師は次のようなことを言われました。

「参禅において本当に布団上で死に切って、身をもって見解を呈する者は少なく、公案について自分の頭で考えた私見を述べることを参禅と思っている者が少なくない。公案というものは、一則一則の中に仏祖的伝の尊い仏智見というものが隠されている。この仏智見を開くのは容易ではないけれども、本当にこの仏の智見を開くことができれば、人間の心の渋の皮がむけて本当の禅者の姿になり、仏の本懐に添うことができる。しかし残念ながら、そのような真正の見解には未だしの感が強い。それは、「私」「個我」というものが残っていて、その個我で工夫し、その個我が見解を呈しているからである。公案になり切る、公案三昧というのは、「不二一如」ということであり、少しの「私」があっても三昧とは言えない。それでは本当の見性をすることはできない」

概ね、このようなことを述べられた訳です。

正に寒毛卓豎！老師の遺言と思って、深く深く胸に刻みたいと思えます。

5 仏道無上誓願成について

4番目の誓願が「仏道無上誓願成」であります。

この第4願は、第3願の極め付けのところであります。

ここでは禅門末後の一著という極め付けの一段を透過して、仏法

至極の大道である「空」の真義に徹して行く道が開かれてくる訳であります。

見性成仏を離れて仏道はありませんが、同じ見性でもここは見性了々、十牛図でいえば「人牛俱忘」というところ、

「鞭索人牛 悉く 空に属す。碧天遼闊として信通じがたし。紅炉焰上争でか雪を容れん。此に到ってよく祖宗かなに合う」と詠まれている一段であります。

これは聖なるもの、神々しいもの、荘厳なるものを悉く破砕したところで、「凡情脱尽し、聖意も又空ず」といわれている。

禅すら捨て、仏すら捨て、法すら捨てる。あらゆる価値をボツ越えた千眼も窺いがたき境涯であります。師父の法さえも截断するというおそろしい場であります。かの巖頭が、“大小の徳山未だ未後の句を会せず”とやった場面であります。

「後へに来るものなく、前に去るものなし。未審し誰によってか此宗を継がん」といわれるとおり、嗣ぐべき法など一法もなしという有様、悟るべき自己も、悟られるべき法もなく、度すべき衆生一人もなしという、この極点に到ってはじめて「仏道無上」ということができる訳です。

ふつうの宗教はいわゆる聖なるもので行き止まりであります。

しかしそれでは如是法界、いわゆる事々無礙法界に突きぬけることはできない。返本還源といいますが、「本来清浄にして一塵を受けず」という真実のところには出ることができない訳です。

これは決して我田引水ではありませんが、実際にここまで引き上げて境涯を磨くということは、おそらく禅以外にはない。磨軻庵老師が晩年「私たちはこれだけの修行をしているのだぞ」とよく言われていましたが、そういわれた所以はここにある筈であります。

ここを宝鏡三昧とは言うのであります。

「如是の法仏祖密に附す。汝今これを得たり、宜しく法護すべし。

銀椀に雪を盛り明日に鷲を蔵す。類して等しかず、……（云々）」
 というこの宝鏡三昧、仏祖方が身命財をなげ打ち、艱難辛苦して護
 持し来たったものであり、これは偶然に今日あるものではありません。

「教外別伝、いやしくも又来らず」。と申しますが、よくよくそ
 のことを憶うべしであります。

では、この無上道たる仏道を成じ切ればどうなるのか。

その時は一転して元に戻る、再び「衆生無辺誓願度」であります。

修行によって自分というものの影がすっきりとぬぐわれてくれ
 ば、「衆生の病が即ち我が病となる」訳で、この願輪は自分一代で
 はなく、次から次へと引きつがれて行くことになります。立教の主
 旨の「自利、利他の願輪を廻らす」とはこのことを言います。こう
 して無限の時間に亘って、この道心を護持し相続して行くことにな
 る訳であります。

私たちは修行のはじめにおいて、この四弘の誓願を己が誓願とす
 ることを誓うと共に、修行の途中においても、そして修行の終りに
 おいてもこれを依然として己が誓願として転じて行くことになりま
 す。しかもその誓願は己れ一個というに止まらず、先程も申したよ
 うに生れ変り死に^{しょうしょう}変り^{せせ}生々世々、この願輪を転ずることになる訳
 であります。

6 四弘誓願の展開

さて、私たち修行者が等しく胸間に掛在すべき四弘誓願について
 みてきましたが、この誓願を展開して明治の時代、禅門を士農工商
 の身分制度が廃された新しい時代に即応させるものとして、居士禅
 の道を拓かれたのが両忘老師であり、さらにその跡を受けて、敗戦
 という未曾有の国難を経ることによって我国社会が手にすることが
 できた民主社会にマッチした坐禅修行の集団としての人間禅を創設
 されたのは耕雲庵老大師でありました。そして老大師は坐禅修行の

目的を明確にして、人間形成の禅の道を唱導されたのであります。

教団創立60周年を迎えた昨年、総裁の肝入りで「人間禅の精神」と題した小冊子がまとめられ、総裁自らが「立教の主旨」を提唱するという運動を起こされました。これは大変に意義のあることで、日頃修行事に埋没してともすればマンネリズムに陥りがちの私たち団員に深い反省をうながすと共に、創立60年という時代の流れの中で私たちが護持発展せしめなければならぬ根本的な事柄と、時代に応じて変えてゆかねばならぬことがあることについても問題提起がなされたものとして、各々が深く受け止めるべきことでありました。

私も先般の房総撰心におきまして、「立教の主旨」を講じさせていただきましたが、改めて老大師の卓抜したご見識と境涯の深さ大きさに感銘を受けた訳であります。老大師のお説を読みかえしてみ、特に深く心を打たれ、又心に残りましたのは次の一事でありました。

7 正念の工夫について

(1) 我教団の三省願文の第1には、「正念の工夫断絶するなからんことを願う」とあり、この正念の工夫不断相続ということが、坐禅修行の中で極めて重要な意味をもつものであることが示されていることは御存知のとおりであります。耕雲庵老大師は教団30年史の「人間禅教団の来由」の中で、「念々正念、歩々如是」の標語を説明されるに当り、“念々正念”とは三省願の第一にある「正念の工夫断絶するなからんことを願う」であり、“歩々如是”はその第二にある「如是の活法軽忽するなからんことを願う」の謂いであるとされた上で、「我が人間禅においては、これをもって理想的の心の修練法とする。そしてこの修行は死ぬまで絶やすべきでない。彼の公案の工夫とか提唱の聴聞とかは、その補助にすぎない。念々正念、歩々如是であるべく、道眼を磨き道力を養うための方便として、古

人の実修したこの方法が適当なるものと認めて、これを採用しているに過ぎない。もしこれに代るべき、よりよい方法が案出されるならば、我々はその方法を取り入れることに、やぶさかなるものではない。

故に人間禅は、古来の講本や公案を離れても成り立つが、念々正念、歩々如是の実習を離れては、万に一つも成り立たないのである。」とされていることでもあります。

(2) 人間禅において、「正念の工夫」或いは「正念の工夫、不断相續」ということが如何に重要なものであるかは、老大師がただ今断言されているところでありますが、勿論これは人間禅の独創という訳ではなく古人の多くも修行事における正念の工夫の重要性に言及されています。

東嶺禅師も宗門無尽灯論の附録「行事論」の中で、「正念工夫は無上の行事なり、苟も正念工夫有るときは行相に泥^{なづ}まず、威儀に拘わらず、理に即し事に即し、坐に即し行に即し、是に即し非に即し、動に即し静に即し、法に即し非法に即し、世間に即し出世間に即し、只正念工夫を失わざらんことを要す。

但らく道へ正念工夫の端的、是れ什麼の道理ぞ。參禅修定是れ工夫の端的、見性悟道是れ工夫の端的、差別の關鎖是れ工夫の端的、向上の一路是れ工夫の端的。三世の諸仏但正念工夫の端的を證し、歴代の祖師但正念工夫の端的を伝う。五時八教但正念工夫の端的を演説す。古則公案但正念工夫の端的を商略す。粗有り細有り、浅有り深有り、疎あり親あり、生有り熟有り。後学の初機は切に須らく參決すべし、旧參の上士は切に須らく仔細にすべし」と云われています。

かつて前總裁の青嶂庵老師が『人間禅』120号においてこれを取り上げられ、次の様に解説しておられます。

「正念工夫といっても正念が得られていなければ工夫のしようもない。正念を悟得するには、我門の実参実証が最も手っとり早い。それも初則を何としても透過しなければ始まらない。初則を透過して宇宙を我面と空じ得たとしても、あくまでも見性入理の段階であり、日常に見性の端的が生かせる筈もない。従って、見性入理から見性悟道、難透難解、向上と進んでいく修行の全ての道程が正念工夫の端的であるが、特に難透難解の公案をぶつけられる段になったら、いよいよ正念工夫に意を決して立ち向かわねばならない。倒れては起き、忘れては意を新たに、千遍転んでも立ち上る風情となる。更には家庭や職場の生活の中で夫々の事に即して正念化するのには難中の難というべし。」と書かれています。

青嶂庵老師をして正念工夫に悪戦苦闘された有様が如実に述べられている有難いお示しであります。

(3) 今一つ古人の言説を引きますと、臨濟禅師は、臨濟録の中で、「汝もし仏祖と別ならざらんことを得んと欲せば、只如是に見て疑誤することを用いざれ。心々不異なる、之を活祖と名づく。」と書かれています。

「心々不異」とは、一念一念が純真でまじり気がなく、常に正念の塊りであることで、正に「念々正念」であります。無限の時間に亘って間断なくこれができたらそれは仏祖の境涯であります。だから臨濟も「之を活祖と名づく」と言っている訳です。臨濟の有名な言葉「隨所に主となれば、立処皆な真なり」も、実にこの境涯から発せられた語であると思われます。

東嶺禅師や臨濟禅師の外にも、正念工夫の重大性に触れられた仏祖の言説は枚挙に暇がありません。

主人公！惺々著！！とやった瑞巖の師彦和尚の喚主人公の話や勅使の来訪を受けてもミジツともすることなく正念工夫を続けたとい

う衡山こうざんの懶瓚らいざん和尚の逸話や、五条橋畔20年の大灯国師の行履、敢えて狼の群に身を投じ文字通り命がけで正念相続の鍛錬をしたという正受老人の逸話など、大力量底の仏祖方は皆ここに意を用いてこられたことは疑いの余地はありません。

(4) さて、そこで問題となるのは「正念」とは何かであります。

青嶂庵老師のいわれるとおり「正念工夫といっても正念が得られていなければ工夫のしようもない」のが道理であります。正念工夫の重要性に触れる言説は多くあるのに比し、正念工夫の何たるか、「正念」の端的に言及したものは、ほとんど見当たりません。それは、この「正念」或いは「正念の工夫」こそ、仏祖密に付するところの如是法の端的であるが故の必然の結果であるとも思われますが、少しは手がかりとなる言説がほしいところであります。

この点につき、磨甌庵老師は学道用心集講話の中で、「洞山大師の語を借りれば、「我」とは道の正位、「法」とは道の偏位で、我と法とは全く主と客、正と偏と対峙していながら、本来不二一如の実相で、私たちが「正念」と呼んでいるものは、この「正偏回互」の姿なのである」と示されています。

そして「もし正位に住すれば、却って滞りて真を失す。偏位に照され、現前の境を昧まらず、それを空ず。但し、もし偏位に失すれば、正位の機略なく、活潑々地のせいぎ生気を失す。正偏回互なり、ここを銀椀盛雪、明月蔵鷲となす、これ宝鏡三昧なり」とも書き残されています。

こうなりますと、一口に正念工夫と言っても、その正念の当体を嘔み破ることは、実は容易では無いと言うべきです。

多くは誤って吾我の見、個我の念を抱いて正念と取り違えている恐れがあります。

自己の根源が空なることを証得して、自らの中に本有円成の本心

本性の珠相が現じ、眞実宝鏡三昧を行取しなければ、「正念」はわがものとはならないことを知らねばなりません。「正念に住する」とか「正念を転ずる」ということが言われますが、その時果して住しているところの正念が本物なりや、転ずるところの正念が本物なりやを深く反省してかからねばならぬ訳です。本当に五蘊の雲を空じ切って、本来無一物の境涯を実現しているか否か、多くは途中の景色の中で、自己免許を下して、正念相続をしているつもりになっていることに気付かず、多年に亘り中途半端な死工夫をしているにすぎないのではないかと、大いに疑うべきことであります。

私たちは見性入理によって一旦は正念の当体を体験する訳です。しかし「無量劫来の業識」と呼ばれる私たちの我執の念は深重であって、見性入理程度の正念では、すぐにメッキがはがれてしまいます。どうしても歳月の長きをいとわず、修行に打ち込まなければなりません。事の上においてこれを身につけて行く為には、静中即ち坐禅工夫においては数息観の厳しい修練によって深く三昧の力を養い、動中即ち日常底においては、五蘊皆空の実践が重要であると思います。如何か色蘊を空ぜん！如何か受蘊を空ぜん！と日常において五蘊の雲を空じる行履が重要であります。

先程、磨甌庵老師の遺言とも言うべき公案三昧の御示しに触れましたが、ことを修行事に限ってみても、見るべき人が見れば私たちの正念相続の有様は不徹底で不十分であること明々白々であると言われるのでありますから、師匠の手元を離れ、各人がこれを世間事の上において実践していく、自己の責任において一切時一切処において活祖の境涯を実現していくなどということは、誠に言うは易くして行うは難いことをつくづく思う訳であります。

(5) しかしながら、耕雲庵老大師は、『宝鏡三昧』では【只よく相続するを主中の主と名づく】とされておるが、念々正念、歩々如

是ということが主中の主であり、立処皆な真なる所以であり、仏祖密付底の如是法といってもこれ以外のものではない」と断言されています。要は真実「正念」の当体を噛み破り、「念々正念」の実を挙げることであります。愚直に、一途にやり抜くしかないのであります。

私たちは仏道の修行者として、この正念工夫不断相続の力を養い、自受用の上でも、又他受用の上でも真の大力量を得て、両忘老師や耕雲庵老大師が拓かれたこの居士禅の道を、将来に向かって進展せしめて行かなければなりません。それが、とりも直さず私たちにとっての四弘の誓願の展開でありまして、その使命たるや誠に重いものであることを思うばかりであります。

本席は自戒の意味を込めながら、四弘誓願とその展開ということで駄弁を弄しました。以上をもって終りと致します。

(平成21年9月25日、本部撰心会の提唱より)

著者プロフィール



稲瀬光常（本名 / 道和）

昭和22年、愛媛県生まれ。弁護士。愛媛弁護士会会長、日本弁護士連合会理事を歴任。現在、松山市で稲瀬法律事務所を経営すると共に、学校法人新田学園理事長を務める。昭和42年人間禅白田劫石老師に入門。人間禅師家。庵号 / 金峰庵。